

櫻井 武司

最先端を行くサブサハラ・アフリカの農村

多くの日本人にとってサブサハラ・アフリカ（以下、アフリカ）、とりわけその農村部はなじみが薄く、近年の急速な経済成長にもかかわらず、貧困や飢餓、疫病、暴力が蔓延する「暗黒大陸」のイメージは払拭されていない。報じられるニュースはそうしたイメージを補強するものばかりである。しかし実際に現地を訪れると、「暗黒」という期待は裏切られるであろう。私自身はおよそ二〇年前に初めてアフリカの農村に入ったが、当時でも貧しくみえることを除けばまったく平穏な日常生活が営まれており、暗黒の片鱗をみつけることはむしろ、二〇年後の現在でもアフリカの農村の見かけに大きな変化がないことである。しばしば指摘されるように、農村の貧困削減が進んでいないことが原因なのだろうか。

今年（二〇一五年）はミレニアム開発目標の達成期限の年である。アフリカでは期限までにほとんどの目標が達成できそうになく、農村の貧困削減が進んでいないという指摘は妥当なものに思える。しかし、厳密な家計調査に基づき所得や消費の長期的動態を探るなら、農村でも貧困は確実に減少していることがわかる。小学校の建設も進み、就学率が向上し、働き手の識字率も上昇している。外見に顕れにくいところでは変化は確実に進んでいるのである。実は、みただけではわからないが、アフリカの農村は世界の最先端にあるとさえいえる。

なによりも、アフリカの農村では現代的な経済制度が未発達だったことが逆に幸いしている。

先行者へのキャッチアップが早いどころか、旧来の制度にとらわれることがないので、簡単に先行者を超えることが可能である。その典型例は携帯電話であろう。有線電話網のない農村の通信手段として急速に普及しただけでなく、金融機関や行政機関の存在しない農村にそれらの機関へのアクセス手段としての利用が拡大した。具体的には、決済や送金、インデックス型保険の購入や保険金の受け取り、化学肥料補助金クーポンの受け取り、市場価格情報の入手などが実用化されている。

アフリカの農村のこうした制度改革は、携帯電話の利用に限ったものではない。しかも、新しい制度の有効性の検証が、ランダム化比較試験（RCT）により実施されることが多いという点においても、アフリカの農村は先端的である。農業技術普及、教育、保健といった農村開発の主要分野については、アフリカの農村にも長年にわたる取り組みの経験がある。しかし、資金や人材の不足から十分に機能しているとはいえず、制度の改革は急務である。何をどう変えるべきか？ この問いに答えるため、アフリカ各地の農村でRCTを使った様々な実験が行われている。現状では局所的な試みに過ぎないが、こうした実験を通じて低コストで有効性の高い制度がみつければ、アフリカ全体に新制度が広まっていくであろう。

このように、二〇年前と変わらないアフリカ農村のたたずまいの内側では、最先端の農村開発が行われており、大きな変革が始まろうとしているのである。

さくらい たけし／東京大学大学院農学生命科学研究科・教授

ミシガン州立大学 Ph.D. 専門は農業経済学、開発経済学。農林水産政策研究所、一橋大学経済研究所等を経て現職。編著書に『貧困と経済発展』（大塚啓二郎と共著、東洋経済新報社、2007年）など。